

ДОНДОГИЙН ЦЭВЭГМИД : БУЛШИН ДЭЭР

長篇叙事詩

墓場にて

D.ツェベグミド

松田忠徳訳



恒文社

ДОНДОГИЙН ЦЭВЭГМИД : БУЛШИН ДЭЭР

長篇叙事詩

墓場にて

D.ツェベグミド

松田忠徳訳

恒文社

著者 ドンドギーン・ツェベグミイド

1915年モンゴル東部の遊牧民の家に生まれる。
モンゴル国立大学、ロマノソフ国立大学(ソ連)
卒。現在、モンゴル人民共和国副首相兼文化大
臣、詩人。中国大使、モンゴル国立大学学長も
歴任。日本にも2度来日。15歳にして小学校の
教師になり、同時に文学活動も開始する。代表
作として「墓場にて」の他に小説「牧童ナイダ
ン」などがある。

訳者 松田 忠徳

1949年 北海道生まれ。東京外語大大学院卒、
翻訳家

著書 詩集「ひとつのフェイブル」(飯塚書店)
「クマゲラのいる島」(大日本図書)
「火の山と生きものたち」(大日本図書)
「外国人によるモンゴル文学論集」
(共著、モンゴル語、ウランバートル)
訳書 「草原と炎—モンゴル詩人選集」(飯塚
書店)
「クネーネ詩集」(飯塚書店)
「世界黒人詩集」(共訳、飯塚書店)
「資本主義を飛び越えて」(シルクロ
ード社)
「ネルーダ・愛の手紙」(東邦出版社)
「新しいアフリカの文学」(白水社)
「泣くな我が子よ」(門土社)など



©1981

長篇叙事詩・墓場にて

定価 1,900円

1981年10月25日 第1版第1刷発行

著者 D・ツェベグミイト
訳者 松田 忠徳
発行者 池田 恒雄

発行所 株式会社 恒文社
東京都千代田区神田錦町3-3
〒101 電話 291-7901
振替口座 東京5-35824

落丁本・乱丁本はお
取り替えいたします

印刷・鈴木整版 製本・飯塚製本

ISBN 4-7704-0467-0 C1089

親愛なる日本の読者の皆さんへ

天を支える山々や果てしなく広がる麗しき草原や光り輝くゴビの大地を旅していたとき、ミルクのように白い冠をかぶった華麗なる秀峰アルタイの麓で遭遇した出来事から着想をえて、私がこの「墓場にて」という叙事詩を書いたのは、今からもう四十年も昔のことでした。

この叙事詩を、私は祖国の独立と牧民の自由を勝ちとるための清い闘争に、自からの命をその勇敢な英雄的行爲によってなげうった革命的先人の輝く追憶に捧げて書いたのです。

私のこの叙事詩を、モンゴル語から日本語に翻訳していただいた松田忠徳氏と出版元の恒文社社長池田恒雄氏に感謝の気持を表するとともに、親愛なる読者の皆さんに平和な生活と幸福を祈りたいと思います。

一九八一年二月

D・ツェベグミイド



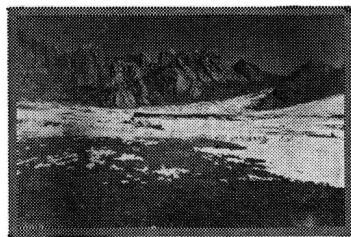
D・ツェベグミイド

長篇叙事詩・墓場にて

D・ツェベグミイド
松田忠徳 訳

アルタイとハンガイの国境^{くにざかい}を
旅していたときに
遭遇した出来事を
ここに詩にして語ろう。

はるか西の果てに
アルタイの雪におおわれた嶺が
青天の飾りとなって
白い綿雲のようにそびえ立っている。



それはまるで積雲のような

とてつもなく大きな山で

その峻嶺は明けの明星の光りを受け
くつきりと浮んでいる。

星の光りが峻嶺を

鮮やかに浮びあがらせている下を

わたしは太陽の沈む西の

狭い峡谷へとむかった。

いつしか 涼風が吹きただよいはじめ

綿雲が沸きたち

みるみるうちに

雨雲が山のように積みかさなり

遠く空の端から

稲妻のとどろき鳴りわたる音をともないながら

秋の涼雨が

激しくわたしを目がけ襲ってきた。

稲妻が閃き

ひらめ

大地を揺るがし

弓で射た光の矢が

真黒な雲塊を突き抜けた。

とその時　うす明るい雲の下

雪を抱いた山の端より

疾風のごとく進んでくる

一頭の鮮やかな栗毛の馬が視界に入った。



渾身の力をふりしほり

疾走する駿馬の手綱をとる

馬上の人影が

わたしの心を踊らせた。

そのおぼろげな姿は

若者のようだったが

よく見ると

初老の男であつた。

ほどなく聡明そうな老人が鞭打ちながら

わたしのところへ駆け寄ってきた。

わたしたちは挨拶をかわし

旅路をともにした。

明るく広いその額からは

いかにも勇敢な氣質がうかがわれたが

柔和なその眼差しには

優しさが宿されていた。

わたしは「男子の美德は

同志に対する敬愛なり」

「駿馬の名声は主人に対する

忠心なり」という言葉を思い出し、

「邂逅かいこうあいまふ相逢える朋友は

旅の道連れなり」と考え

旅路をともにすることにしたので

老人は心から喜んでくれた。

老人とわたしは

とりとめもなく談をかわしながら

南へつづく道を

険しい峠へとむかった。

風が吹き狂い

涼風が身にせまる

遠く山麓にたどり着いたが

なお村影は見あたらない。

闇のなかを吹きすさぶ暴風雨は

いかり狂ったようにうなり声をあげ

崖ぶちを見守る

にれの木をゆする。

「ああ、ひどい風だ

おまけに冷たい雨まで混じって、

おやじさん、早く行きましよう

急いで村道に出ましよう」とわたしが言うと、

「大水がつき氾濫するのは

恐ろしいことだが

作物が育つので

結局は恵みとなるものじゃ

枯れた大地は渴きをいやし

干からびた植物は息を吹きかえす

なかに、若いのに、心配することはない

あとで 滋養物をちょうだいしようや」と老人が答えた。

一直線に走る

道の左手にある

高い雪を抱いた山の

太陽が焼きつける南斜面に

猛獣の立像によく似た

突き出た岩が目に入った

あそこで烈雨を避ることが

できそうだと思い

わたしたちは馬首の向きをかえた。

老人が先駆けし

旅人のわたしは彼にしたがい まもなく

きり立った岩山の麓にたどりついた

幾年にもわたり

老いた大鷲が巢をつくり

長年の間

蒼空の太陽が庇護し

幾百万年の間

草原の風が吹きさらし

幾百万年の間

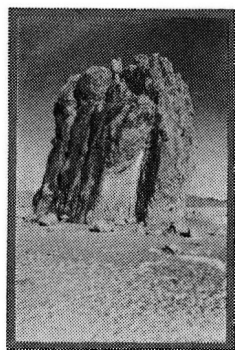
鮮苔が厚くおおった

古代の

巨大な岩山の

雨の当らない南面に立ちすくんだ

老人の顔が 一瞬曇った。



オボの石のかたまりをじっと見つめ

首を垂れ立っている

その姿には

憂いの影がさしていた。

美しいその白髪は

輝く真珠の飾り

明るく聡明そうなその額は

まさしく英雄叙事詩の容貌だ。

老人はその顔を静かにこちらへむけると、

険しい眼差しで

わたしを見つめ

厳しく問いかけた。